紀伊民報

(5)　2008年(平成20年)1月29日　火曜日　第19580号

水族館へ行こう！

30

タコノマクラ

京都大学白浜水族館

太田 満

△ウニらしくないタコノマクラ（水槽番号403）

前後があるウニ

タコノマクラはウニの仲間だが、皆さんが思い描くウニの姿形とは大きく違っている。とげは2ミリ程度とごく短く、殻は扁平（へんぺい）で、上から見ると丸みのある細長い五角形をしている。

普通のウニの肛門（こうもん）は殻の真上にあるけれど、タコノマクラは口のある裏側の後端にある。だから、体の前後がはっきりしていて移動する方向も決まっている。多少横にずれることはあっても、肛門のある後方に進むことはない。

陸奥湾から九州までの浅い砂れき底にすみ、少し砂に埋もれた状態で、殻の上に砂粒や小石、貝殻、海藻を覆ってカムフラージュしている。伊豆諸島などでは、岩盤にへばりついているものも多く見られる。

拾い上げると、殻の上面には、タコノマクラ類に特徴的な5枚の花びら模様がはっきりと見られる。これは花紋と呼ばれ、ヒトデやナマコ、ウニなどの棘皮（きょくひ）動物に特有の管足が、殻の内側から伸び出る部分である。

白浜水族館ではかつて、このタコノマクラをガンガゼやノコギリウニなどとともに狭い水槽で飼育展示していた。しかし、タコノマクラはなぜか長生きしなかった。ある晩、宿直で見回っていると、数匹のノコギリウニが一つのタコノマクラに覆いかぶさるように群がっているのを発見した。翌朝、このタコノマクラを取り上げてみると、上面のとげがかじられて丸裸状態になっていた。

その後も同様の事件が続いたので、広々とした砂地のある水槽に移した。ノコギリウニによる被害はなくなったが、それでも1年以上生きることはない。今度はどうやら餌の問題のようである。

このユーモラスな和名は、明治初期に、著名な動物学者で東京帝国大学教授の飯島魁さんによって付けられたが、江戸時代には、ヒトデ類やクモヒトデ類の呼び名として広く使われていたことが知られている。

（京都大学技術専門職員）